Ｒ５地域協働研究（ステージⅠ）

R05-Ⅰ-17「地域共創人材が持つ10の資質・能力の測定評価方法の開発」

課題提案者：岩手町
研究代表者：高等教育推進センター　渡部芳栄
研究チーム員：谷地健人（岩手町）、高瀬和実（高等教育推進センター）

＜要　旨＞

岩手町は2020年度に「SDGs未来都市」に選定され、「SDGs未来都市共創プロジェクト」を推進中である。このプロジェクトはSDGsを共通言語とし、持続可能な地方都市のモデルを目指すもので、その中心となる「地域共創人材」を育成する。本研究の目標は、「地域共創人材」に必要な10の資質・能力を測定する項目を開発し、教育改善の課題を明らかにすることである。2回にわたる独自調査と外部テストとの比較分析の結果、独自調査の尺度における項目の信頼性は高かったものの、妥当性に関しては高いとは言えず、さらなる尺度・項目の改善を進めていく必要がある。

１　研究の概要（背景・目的等）

岩手町は2020年度に内閣府から「SDGs未来都市」に選定され、「SDGs未来都市共創プロジェクト」を推進している。このプロジェクトは、SDGsを共通言語とし、町内外の企業や団体を巻き込んで持続可能な地方都市のモデルを模索するものである。その中心となる人材を「地域共創人材」と定義し、町に愛着を持ち、高い志を持って自己実現と地域の将来像を重ね合わせ、地域内外の様々な人・企業や団体と協力しながら変化を生み出せる人材を育成することを目指している。

「地域共創人材」に求められる資質・能力は、基礎学力・基礎スキル、創造力・発想力、課題発見力・設定力、課題解決力、自信/自己効力感/自己肯定感、果敢な失敗と回復力、当事者意識、多様性の中で協働する力、周囲を巻き込み動かす力、遊び心の10項目である。岩手県内の全ての県立高校では、高校と地域が協働して魅力ある高校づくりを目指す「高校魅力化」に取り組んでおり、町内の沼宮内高校も「地域共創人材」の育成を進めている。これらの活動やビジョンは高校のHPや県教育委員会のプラットフォーム「note」で情報発信されている。高校における「地域共創人材」育成のプロセスと成果の可視化が重要であるが、10の資質・能力を定義しているものの、その可視化は十分とは言えない段階である。成果の可視化は、「SDGs未来都市共創プロジェクト」の担い手を育成できているかの説明責任を果たすためにも必要であり、さらなる高校「魅力化」にとっても重要である。また、入学志願者や入学者の増加にもつながる可能性がある。

本研究の最終目標は、「地域共創人材」が持つ10の資質・能力を測定する項目を開発し、その分析・評価を通じて教育改善に資する課題を明らかにすることである。測定・評価項目の妥当性を検証し、必要に応じて改良しながら教育の改善課題を抽出することも求められる。これにより、高度化した地域共創人材を輩出し、「SDGs未来都市共創プロジェクト」がさらに推進されることを目指した。

２　研究の内容（方法・経過等）

本研究で取った方法は、主に２つである。第１に、地域共創人材」に必要とされる資質・能力を測定できる尺度及び質問項目の開発、第２に開発された質問項目による測定の実施・結果の検討である。

「地域共創人材」に必要とされる資質･能力については、従来から心理学において似た概念が扱われてきたため、本研究ではまず、教育心理学・発達心理学等における尺度及び測定項目の検討を行った。先行研究で使用・開発された尺度のうち10の資質・能力に関係があると思われた約30の尺度とその測定項目（約400項目）を検討し、それらを参考にして200項目からなる独自の質問紙を作成した。質問紙調査の構成は、以下の通りである。

①基礎学力・基礎スキル（1 ～ 14）
②創造力・発想力（0から1をつくる力）（15 ～ 22）
③課題発見力・設定力（23 ～ 55）
④課題解決力（56 ～ 72）
⑤自信/自己効力感/自己肯定感（73 ～ 82、83 ～ 105）
※この概念はいくつかの下位概念を含んでおり、2つにわけてまとめている。
⑥果敢な失敗と回復力（レジリエンス）（106 ～ 126）
⑦当事者意識（127 ～ 142）
⑧多様性の中で協働する力（コラボレーション能力）（143 ～ 166）
⑨周囲を巻き込み動かす力（リーダーシップ）（167 ～ 184）
⑩遊び心（185 ～ 200）

独自の質問紙調査は、沼宮内高校の2年生を対象に2023年6月と11月に実施した。また同じく11月には、一定の信頼性･妥当性が見込まれる外部テスト「PROG」を利用して、独自の質問紙調査の結果と比較分析を行った。次節で分析の結果を報告する。

３　これまで得られた研究の成果

１）信頼性について

	１回目	２回目
１基礎学力・基礎スキル	0.94	0.91
２創造力・発想力（0から１をつくる力）	0.89	0.77
３課題発見力・設定力	0.94	0.94
４課題解決力	0.96	0.94
５_1自信／自己効力感／自己肯定感	0.73	0.66
５_2自信／自己効力感／自己肯定感	0.85	0.73
６果敢な失敗と回復力（レジリエンス）	0.84	0.82
７当事者意識	0.76	0.71
８多様性の中で協働する力（コラボレーション能力）	0.97	0.95
９周囲を巻き込み動かす力（リーダーシップ）	0.76	0.76
10遊び心	0.97	0.95

上表は、独自調査の各尺度についてのクロンバックのα係数（信頼性）をまとめたものである（0.9以上のものはオレンジ、0.7未満のものは水色で塗りつぶしている）。α係数は0.7以上を目安とされることが多いため、今回測定しようとした尺度については概ね高い結果と言える。特に、「１基礎学力・基礎スキル」「３課題発見力・設定力」「４課題解決力」「８多様性の中で協働する力（コラボレーション能力）」「10遊び心」については1回目・２回目とも0.9を超え、十分な内的整合性を示していることがわかる。塗りつぶされていないところは相対的に低かった(0.7～0.8台)ものであるが、「５自信／自己効力感／自己肯定感」については２回目でいずれも低くなっていた（1つは0.7未満）。

２）妥当性について

	1基礎学力・基礎スキル	2創造力・発想力（0から1をつくる力）	3課題発見力・設定力	4課題解決力	5自信／自己効力感／自己肯定感	5自信／自己効力感／自己肯定感	6果敢な失敗と回復力（レジリエンス）	7当事者意識	8多様性の中で協働する力（コラボレーション能力）	9周囲を巻き込み動かす（リーダーシップ）	10遊び心
親和力	-0.19	0.15	-0.02	0.00	-0.06	0.21	0.14	0.29	0.18	0.30	0.06
協働力	-0.05	0.17	0.12	0.22	-0.17	0.11	0.08	0.29	0.30	0.33	0.12
統率力	0.04	0.47	0.17	0.30	0.34	0.36	0.34	0.62	0.25	-0.03	0.18
感情制御力	0.16	0.36	0.13	0.24	0.39	0.29	0.49	0.66	0.35	0.02	0.24
自信創出力	0.15	0.39	0.27	0.37	0.19	0.12	0.44	0.44	0.42	0.24	0.45
行動持続力	0.04	0.43	0.09	0.18	0.32	0.34	0.41	0.64	0.13	0.10	0.14
課題発見力	0.18	0.13	0.20	0.36	0.19	0.26	0.37	0.37	0.29	-0.05	0.20
計画立案力	0.27	0.27	0.34	0.45	0.10	0.24	0.35	0.21	0.27	0.01	0.30
実践力	0.31	0.43	0.42	0.54	0.34	0.27	0.45	0.16	0.28	0.06	0.30

続いて、外部テスト「PROG」（コンピテンシー）を用いて、測定したい尺度･質問項目が妥当かどうかの検討を行った。表頭にあるのが､独自調査によって測定した尺度であり、表側にあるのがPROGによって測定した尺度である。表で示されているのは、個々の生徒の２回目の独自調査によって測定された尺度得点と、PROGによって測定された得点を用いて算出した相関係数である（相関係数0.4を超えるものを塗りつぶしている)。PROG実施前に想定していた両テストの関係と、分析の結果は以下の通りである（◎：想定通りの結果、○:一部想定通りの結果、×:想定とは異なる結果)。

１基礎学力・基礎スキル：測定不可（◎）
２創造力・発想力：測定困難（×）
３課題発見力･設定力:「課題発見力」「計画立案力」(×)
４課題解決力：「実践力」（○）
５自信/自己効力感/自己肯定感：「自信創出力」（×）
６果敢な失敗と回復力：「感情制御力」（○）
７当事者意識：「行動持続力」（○）
８多様性の中で協働する力：「親和力」「協働力」（×）
９周囲を巻き込み動かす力：「統率力」（×）
10遊び心：測定不可（×）

４　考察と今後の課題

以上から、今回開発した独自調査については、一部の尺度を除き信頼性は高いものの、妥当性については引き続き検討する必要があることがわかった。より詳細にいえば、第１に独自調査では信頼性が１回目より２回目で落ちている尺度があったこと、第２に独自調査とPROG調査の比較分析の結果では、想定どおりにいかない尺度が多かったことが明らかになった。

第１の点に関しては、心理学研究で使用されるものと比較して特段多いわけではないものの、200問という項目の多さが高校生にとっては集中力等の問題もあり、難しいものだったのかもしれない。そのことは、ほとんどの項目で同じ数値を回答している生徒の存在や、平均回答時間の短さなどからも推測できる（1回目平均時間：13分13秒、２回目平均時間：12分10秒)。

第２の点に関しては、第1の点とも関わるが、回答そのものの精度が高いとは言えず、本来尺度内の他の項目と別の回答傾向になるはずの項目（逆転項目）についても同じ回答傾向が見られたことは否定できない。その上で、当初10の資質・能力と相関があるだろうと思われたPROGの尺度について、なぜ想定通りの結果が得られなかったのかは今後詳細に分析していく必要がある。

10の資質・能力は岩手町で設定した指標であり、その資質・能力が高まるような教育内容・方法を採っていくことは当然望まれる。その上で、評価・測定についても、研究上の意義もさることながら、岩手町で行われている教育の成果を測定するものであることを学校・生徒とともに共有し、正しく測定されるような工夫をしていく必要がある。このことは測定の時期についても関連しており、どういったスケジュール感で資質・能力を高めたいのかを学校と共有し、適切な時期に測定する必要もあるだろう。

さらに、今回の妥当性の分析（相関分析）からも、10の資質・能力が独立性のある指標かどうかはより重要な問題である。資質・能力の再定義も視野に入れながら、さらに信頼性・妥当性の高い測定評価方法となるように、改善を継続していく予定である。

５　参考文献

堀洋道監修、『心理測定尺度集』Ⅰ～Ⅵ、サイエンス社
Xiangyou Sharon Shen et　al., 2014, Validating the Adult Playfulness Trait Scale (APTS), American Journal of Play, volume 6, number 3, pp.345-369

６　謝辞

２度の独自調査及びPROG調査に協力いただいた沼宮内高校の２年生（当時)、校長先生をはじめとする同校の教職員、有益なご意見をくださった関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。